

大学生における主張性と対人ストレスとの関連について

兔本由香里

玉木健弘

日下部典子

福山大学大学院人間科学研究科 武庫川女子大学文学部心理社会福祉学科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：大学生，主張性，対人ストレス，P-Fスタディ

はじめに

私たちの日常生活に対人関係は欠かせないものである。特に社会的場面において人と人が互いに適切な距離を保ちながら良好な人間関係を作っていくことは極めて重要である。近年では、青少年における対人関係の変化が多く指摘されており、岡田（1995）は青年の対人関係の特徴として、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけたり傷つくことを非常に恐れる、形だけの円滑な関係を求める傾向があると指摘している。これは岡田（2002）が行った実証的研究でも、同様の傾向が示されている。また、学校への不適応感などを訴える学生も増加しており、松島・塩見（2002）はその原因の一つとして対人関係が影響していると述べている。つまり、円滑な対人関係を求め過ぎると、かえって良好な対人関係を持つことが困難になり、最終的には対人的不適応といった大きなストレスにつながる可能性がある。

ところで、ストレスとは「身体的健康や心理的幸福感をおびやかすと知覚されたできごと」であり、丸山・白川（2006）は、ストレスを物理的ストレスや社会的ストレスなどの6種類に分類している。そして、その中のひとつに対人関係に起因するストレス（以下、対人ストレス）がある。橋本（1997）は、対人関係においてストレスとなりうるできごとを「対人ストレスイベント」と呼び、青年にとって避けることのできない問題であり、ストレスフルなイベントの中でも比較的大きな割合を占めるとしている。つまり、青年にとっての対人関係は、肯定的影響をもたらす反面、深刻なストレスとして否定的な影響を与えることも十分考えられるのである（橋本，2000）。

また橋本（1997）は、大学生を対象として対人ストレスイベントの分類を行っており、「対人葛藤」、「対人劣等」、「対人磨耗」の3種類に分類している。「対人葛藤」とは、「知人とけんかをした、または責められた」というような、社会の規範からは望ましくない事態での対人葛藤に関するもので、他者の行動に起因するものである。また「対人劣等」とは、「相手が嫌な思いをしていないか気になった」というような、対人関係において劣等感を生起させるできごとに関するもので、主体側の要因に起因するものである（玉瀬・角野，2005）。橋本（2000）によると、この「対人葛藤」と「対人劣等」は社会的スキルの欠如から生じる。そして「対人磨耗」とは、「自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた」というような、日常のコミュニケーションで頻繁に起こる、気疲れや配慮を伴うものである（玉瀬・角野，2005）。また橋本（2000）は、「対人劣等」を感じる頻度と社会的スキルに密接な関連があることや、「対人磨耗」を感じる頻度と「気遣い」をする頻度との間に有意な正の相関があることを示している。さらに、玉瀬・角野（2005）は、対人ストレスに影響するとされる要因として社会的スキルの欠如を挙げている。

社会的スキルとは、社会的、対人的な場面において円滑な人間関係を成立させるために必要な社会的、対人的技術であり（坂野，1995）、「人の話を聞く」、「自分を主張する」、「対人関係上での葛藤に対処する」といった、対人場面での広い範囲のスキルが含まれている。しかし、青年たちの対人ストレスに影響しているのは、対人場面全般で必要とされる社会的スキルではなく、ある限定されたスキルである可能性も考えられる。つまり、社会的スキルの中でも限定的なスキルに絞って対人ストレスとの関連をみることで、対人ストレスにはどの社会的スキルの欠如が関係しているか検討することができると思われる。

過去の社会的スキル研究で、水野（2007）は、社会的スキルが関係開始、自己主張、関係維持に分かれることを明らかにしている。そしてその中の一つである自己主張は、英語のアサーションを日本語に直訳した「主張性

(assertiveness)」と同じ意味である(金子・中田, 2003)。主張性は社会的スキルの中に含まれ、対人場面においていかに適切に自己を主張することができるかを問うものである(玉瀬・角野, 2005)。そして、玉瀬・越智・才能・石川(2001)は実際の利用可能性を考慮した「青年用アサーション尺度」を作成し、人とのよい関係を形成することに関する「関係形成」因子と、何らかの葛藤的な場面において相手に対して説得や交渉を行うことに関わる「説得交渉」因子の2因子を抽出している。また、適切な自己主張は男子よりも女子の方が多く行っているという結果を示している。しかし私たちは、相手に対して常に適切な主張をしているとは限らない。相手や状況によって自分の考えを伝えることができないことや、伝えられても相手に不愉快な思いをさせる可能性もある。沢崎(2006)も、現代はインターネットなどの普及により、さまざまな意みを交換することが可能になった一方で、親密な人間関係を体験する機会が減少し、実際の社会的場面において自己や自分の考えを主張することが困難になっていると指摘している。

インターネットによる対人関係の変化や、対人場面での問題は、青年期後期の大学生にも影響を与えていると考えられる。丸山・白川(2006)は、大学生の発達課題として対人関係の拡大に加えて職業生活や配偶者の選択、社会的責任の負担を挙げており、この発達課題に取り組む際に適切な自己表現が困難であると、対人ストレスを感じやすくなり、大学生の心身の健康に悪影響を及ぼす可能性が考えられる。つまり、大学生の対人場面での問題や、精神的健康上の問題を予防するためにも、適切に主張できるスキルを獲得できているか、どの対人場面で対人ストレスを感じているのかについて検討することが必要であると思われる。

これまで、対人ストレス研究やアサーション研究は多く行われているが、そのほとんどが加藤(2001)や沢崎(2006)のように質問紙法のみを用いた研究であった。質問紙法は、比較的短時間で多くの対象者から回答を得ることができるといった長所があるが、同時に、意識的に操作された回答をチェックできないという短所もっており、この短所を補うには、他の心理検査も用いて検討する必要があると考えられる。

質問紙法は対象者の性格特性や状況を客観的にアセスメントする目的で行われるが、その他に自分の感情を他の人や物に位置づけて表現させる方法として投影法がある。投影法とは、あいまいな模様、絵、文章などを与え、これらに対して表出された内容(言語的反応が中心)からパーソナリティの特徴や問題点を診断する方法である(松原, 2002)。そしてこの投影法の一つにP-Fスタディがあるが、P-Fスタディとは、他人から非難されたり、責任を追及されたりするといった日常で起こりうる欲求不満場面での反応パターンから、参加者の反応傾向や、常識的な方法で適応できているかなどをみるものである(秦, 2006)。P-Fスタディでは、反応パターンを3つの方向と型に分類している。3つの方向とは、欲求不満の原因を他者や環境のせいにする「他責」、欲求不満の原因を自分の責任にする「自責」、欲求不満の原因は誰にもなく、不可避な事件なのだと思える「無責」である。そして3つの型とは、障害の強調や指摘に関係し、欲求不満を引き起こした障害を強調する「障害優位型」、自我の強調に関係し、欲求不満場面でストレスを解消するための根本的な反応である「自己防衛型」、問題解決に関係し、欲求不満場面で積極的に解決するための要求に注目した反応である「要求固執型」である(林, 1987)。またP-Fスタディには、これらの反応分類の他に、解釈指標としてGroup Conformity Rating(GCR)がある。GCRは集団一致度とも呼ばれ、欲求不満場面でどの程度一般的、常識的な反応をするかをみるための指標であり、秦(2007a)はこの値が低い場合は非社会的適応を示し、高すぎる場合は神経症による不安を示しやすいと述べている。

P-Fスタディを用いた研究は多くあるが、そのほとんどが、P-Fスタディをアグレッション(攻撃性)を測定するために使用している(工藤, 2006; 秦, 2003)。吉村(2008)によると、Rosenzweig(1978)は、「P-Fスタディにおけるアグレッションは「攻撃性」という日本語と同義ではなく、欲求不満場面での「主張」に近いものである」と述べており、秦(2007b)もアグレッションの基本的な意味は「主張性」であると述べている。また、P-Fスタディに使用されている場面は全て対人葛藤場面であり、対人関係も家族や友人、職場など幅広く扱っていることから、P-Fスタディは幅広い対人葛藤場面での攻撃性だけでなく、各場面での主張性や参加者の反応傾向も測定でき

ると思われる。しかし、質問紙を用いて主張性を検討した研究は多くあるが、P-Fスタディを用いて対人場面での主張性や反応傾向を測定した研究は非常に少なく、また大学生を対象とした研究も少ない。そこで本研究では、主張性を質問紙法と投影法（P-Fスタディ）を用いて測定し、それぞれが対人ストレスにどう関係しているのか検討することを目的とする。本調査の仮説として、(1) 主張性が高い参加者は低い参加者よりも対人ストレスを感じにくく、特に主張性の中の「説得交渉」因子が対人ストレスを低める、(2) P-Fスタディ反応の「GCR」や「自我防衛」反応が高いと、対人ストレスが低められる、の2つを立て、検討した。

方 法

参加者 広島県の大学に在籍する男子大学生 56 名（平均年齢 20.2 歳， $SD=1.3$ ），女子大学生 53 名（平均年齢 19.9 歳， $SD=1.2$ ），計 109 名（平均年齢 20.0 歳， $SD=1.2$ ）。

調査期間 2008 年 4 月下旬～5 月下旬。

実施方法 本調査は 5～6 人の小集団で行った。参加者には本研究の目的を説明し、参加の同意を得た後、質問紙を実施した。そして全員の質問紙の回答が終了した後、P-F スタディ（成人用）を実施した。P-F スタディの表紙に基づいて教示を行い、その後練習として表紙に描かれている例についての回答を求め、参加者に回答させた。

本調査での主張性の測定には、玉瀬・越智・才能・石川（2001）が作成した「青年用アサーション尺度」25 項目を用いた。この尺度は、「関係形成」因子と「説得交渉」因子の 2 因子で構成されている。回答は「1. 全くそうしない」～「5. 必ずそうする」の 5 件法で求めた。また、対人ストレスの測定には、橋本（1997）が作成した「対人ストレスイベント尺度」30 項目を用いた。この尺度は、「対人葛藤」因子、「対人劣等」因子、「対人磨耗」因子の 3 因子で構成されている。回答は「1. まったくなかった」～「4. しばしばあった」の 4 件法で求めた。

なお本調査では、P-F スタディの各反応が特に高い参加者と特に低い参加者との比較をするため、P-F スタディ反応をそれぞれの平均±1SD を基準として高低群に分類し、平均出現率や対人ストレスイベント尺度得点を算出した。

結 果

1. 各尺度における因子得点の算出

本調査では、「青年用アサーション尺度」の 2 因子、および「対人ストレスイベント尺度」の 3 因子の因子間の得点差を検するため、参加者全員の平均因子得点と標準偏差を算出した（表 1）。

表1 各尺度・因子別の平均値および標準偏差（ $N=109$ ）

	青年用アサーション尺度		対人ストレスイベント尺度		
	関係形成因子	説得交渉因子	対人葛藤因子	対人劣等因子	対人磨耗因子
<i>M</i>	27.08	25.70	20.85	18.62	13.88
(<i>SD</i>)	(4.74)	(4.42)	(4.75)	(4.94)	(3.20)

青年用アサーション尺度について、因子間の得点差を検討するため t 検定を行った結果、説得交渉因子よりも関係形成因子のほうが、得点有意に高いことが示された($t(108)=2.59, p<.05$)。また、対人ストレスイベント尺度

についても1要因3水準の分散分析を行った結果、有意な差がみられた ($F(2,216)=245.99, p<.001$)。多重比較を行った結果、各因子の得点は、対人摩擦、対人劣等、対人葛藤の順で高くなっていた。

2. 相関係数の算出

まず、本研究で用いた青年用アサーション尺度と対人ストレスイベント尺度について、尺度間相関を算出した結果、参加者全員および男女の主張性と対人ストレスとの間に有意な相関は認められなかった。また、それぞれの尺度における因子間の相関係数を、全参加者および男女別に算出した。その結果、参加者全体では、「説得交渉」と「対人摩擦」との間に5%水準で有意な負の相関 ($r=-.21$) がみられ、男子も「説得交渉」と「対人葛藤」との間に5%水準で有意な負の相関 ($r=-.29$) がみられた。

3. P-Fスタディ反応の群分けおよび平均出現率の算出

全参加者のP-Fスタディ各反応平均出現率(%)と標準偏差は、GCR55%(14)、他責33%(15)、自責34%(9)、無責34%(10)、障害優位22%(8)、自我防衛51%(9)、要求固執26%(10)であった。そして平均出現率+1SD以上の参加者を高群、平均出現率-1SD以下の参加者を低群とした。各反応における高低群の人数内訳を表2に示す。

表2 各反応ごとの高低群の人数内訳

	GCR		他責		自責		無責		障害優位		自我防衛		要求固執	
	(N=109)		(N=109)		(N=109)		(N=109)		(N=109)		(N=109)		(N=109)	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
高群	11	7	11	7	7	8	14	7	10	9	10	7	6	6
低群	10	7	9	8	11	9	8	8	6	10	7	4	13	3

次に、表2で示された参加者の平均出現率を検討するため、各反応の高低群別に平均出現率および標準偏差を算出した(表3)。各反応の高低群別に男女差を検討するためt検定を行った結果、自責低群で男子よりも女子のほうが自責反応の出現率が有意に高いことが示された ($t(18)=2.43, p<.05$)。その他の反応には有意差は認められなかった。

表3 高低群別の平均出現率(%)および標準偏差

		GCR		他責		自責		無責		障害優位		自我防衛		要求固執	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
高群	M	76	73	57	60	47	49	48	46	35	35	65	63	47	40
	(SD)	(4)	(4)	(10)	(10)	(2)	(4)	(3)	(3)	(4)	(4)	(6)	(3)	(10)	(1)
低群	M	33	33	11	12	20	< 23	14	18	10	10	34	36	10	9
	(SD)	(7)	(6)	(4)	(3)	(3)	(2)	(5)	(5)	(2)	(3)	(12)	(3)	(4)	(1)

4. P-Fスタディ反応と「対人ストレスイベント尺度」についての検討

表2で示された参加者の対人ストレス得点を検討するため、各反応・高低群別に「対人ストレスイベント尺度」全30項目の合計得点の平均値および標準偏差を算出した(表4)。

表4 青年用アサーション尺度の各学年・高低群別の平均値および標準偏差

	GCR		他責		自責		無責		障害優位		自我防衛		要求固執	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
高群	<i>M</i> 83.55	80.29	84.82	84.86	81.29	73.63	77.86	79.29	84.10	72.33	82.30	83.43	83.33	87.00
	(<i>SD</i>) (9.60)	(7.36)	(9.60)	(9.95)	(11.07)	(6.46)	(15.29)	(8.43)	(8.53)	(4.19)	(8.52)	(11.52)	(7.61)	(5.16)
										∨				
低群	<i>M</i> 83.70	83.43	83.22	76.88	83.27	85.11	82.13	85.75	77.83	84.70	84.14	79.25	80.77	69.00
	(<i>SD</i>) (9.35)	(12.48)	(11.00)	(7.11)	(8.18)	(8.45)	(7.49)	(9.54)	(17.82)	(8.98)	(7.62)	(10.47)	(12.45)	(3.74)

対人ストレス得点について反応別に群や性差を検討するため、各反応ごとに群×性別の2要因分散分析を行った。その結果、「自我防衛」において群と性別の交互作用に有意な差がみられた ($F(1, 24)=7.79, p<.05$)。そこで、性別について5%水準で単純主効果の検定を行った結果、有意な差がみられ ($F(1, 24)=9.51, p<.01$)、男子は自我防衛反応高群が低群よりも対人ストレス得点が低いことが示された。また、群についても5%水準で単純主効果の検定を行った結果、有意な差がみられ ($F(1, 24)=8.27, p<.01$)、自我防衛高群は、男子よりも女子の対人ストレス得点が高いことが示された。

考 察

本研究での目的は、主張性を質問紙法と投影法 (P-F スタディ) を用いて測定し、対人ストレスとの関連を検討することであった。そして検討するうえで、(1) 主張性が高い参加者は低い参加者よりも対人ストレスを感じにくく、特に主張性の中の「説得交渉」因子が対人ストレスを低める、(2) P-F スタディ反応の「GCR」や「自我防衛」反応が高いと、対人ストレスが低められる、という2つの仮説を立てていた。

1. 質問紙法で検討した主張性と対人ストレスとの関連について

質問紙法で測定した主張性と対人ストレスとの関連をみるにあたり、両尺度の尺度間相関を算出した結果、参加者全員および男女に有意な相関は認められなかった。しかし、それぞれの尺度における因子間相関を算出した結果、参加者全員では「説得交渉」因子と「対人磨耗」因子との間に、男子では「説得交渉」因子と「対人葛藤」因子との間に、5%水準で有意な負の相関が認められた ($r=-.21, r=-.29$)。玉瀬・角野 (2005) が大学生を対象に行った研究でも弱い負の相関が認められており、本調査と同様の結果が示されている。この結果から、「説得交渉」因子が高いと、対人ストレスの中の「対人磨耗」因子と「対人葛藤」因子が低い傾向が示された。すなわち、対人場面で説得交渉に関する主張ができると、「知人とけんかをした」といった望ましくない対人葛藤や対人場面で生じる気疲れを緩和させることが示唆された。また、「対人磨耗」因子や「対人劣等」因子について玉瀬・角野 (2005) は、スキル欠如によって生じるものと述べている。本研究の結果からも「対人磨耗」や「対人葛藤」を低めるためには、社会的スキルの中でも、相手に対して説得や交渉をするスキルを獲得することが有効であることが示唆された。

2. 各質問紙における因子間の得点差について

表1より、「青年用アサーション尺度」の2因子および「対人ストレスイベント尺度」の3因子について、因子間の得点差を検討した結果、「青年用アサーション尺度」については、「説得交渉」因子よりも「関係形成」因子のほうが得点が有意に高いことが示され、これは沢崎 (2006) と同様の結果である。「関係形成」得点が高いということは、相手とよい関係を形成したり、今の関係を維持しようとする傾向が高いことを示しており、これは現代青年の対人関係の特徴に当てはまると思われる。現代青年の対人関係の特質について橋本 (1997) は、「現代の大学生は人間関係の維持を中心的な課題としており、トラブルはできるだけ避け、意見などについて議論したりしない。」

と述べている。本調査の参加者も、他者との関係形成や維持を重要視するあまり、議論などを行う際に相手とトラブルが生じることに不安を感じ、積極的に交渉や議論する機会を持つとしないのではないかと考えられる。

また、「対人ストレスイベント尺度」についても因子間の得点差を検討した結果、「対人磨耗」因子、「対人劣等」因子、「対人葛藤」因子の順に得点が高いことが示された。しかし、橋本（1997, 2000）が大学生を対象に行った研究では、どちらも「対人葛藤」因子、「対人磨耗」因子、「対人劣等」因子の順に高くなっており、本研究の結果とは異なっている。特に「対人葛藤」因子については、先行研究では最も出現頻度が少ない対人ストレスであったが、本研究では、最も頻度が高いストレスとなっていた。この理由としては、「対人葛藤」因子の質問項目である「知人から責められた」、「知人と意見が食い違った」といった他者の反応を、より否定的に受け取った可能性が考えられる。また、「対人葛藤」因子について橋本（1997）は、他者の行動に起因するものが多く、ソーシャルスキルが発揮されるかどうかの影響を及ぼすと指摘している。他者からあまり肯定的ではない反応を受けた場合、自分の持っているスキルが十分に発揮されないと、自分の意みを上手く表現することができないまま否定的に解釈してしまい、対人葛藤を強く感じてしまうのではないかと考えられる。

3. P-F スタディで検討した主張性と対人ストレスとの関連について

本調査では、P-F スタディの各反応の平均出現率+1SD以上を高群、平均出現率-1SD以下を低群として参加者を分類した。そして、各反応の高低群別に対人ストレス得点を算出した。その結果、「自我防衛」反応、つまりある問題について自分を守ろうとする率直な反応を強く示す女子は、男子よりも対人ストレスを多く感じていることが示された。しかし「GCR」では、対人ストレス得点に差は見られなかった。本研究では、P-F スタディ反応の「GCR」や「自我防衛」反応が高いと、対人ストレスが低められるという仮説を立てていたが、女子では「自我防衛」反応で高いと対人ストレスが高まるという逆の結果となった。この理由として、男女での対人関係方略の違いが関連していると思われる。柴橋（2004）は男女の対人関係方略について、女子は相手との関係維持に気を遣い、その背景で友人からどう思われるかという不安・懸念を強く感じている、と述べている。すなわち女子は、他者に合わせることで周囲と調和しながら関係を維持することで自分自身を守る傾向があると思われる。しかし、関係を維持する一方で、自分が周囲からどのように思われているのかを不安視してしまうため、対人ストレスを受けやすいのではないかと考えられる。

ところで、本調査で用いた日本語版 P-F スタディ（成人用）が作成されたのは1956年と古く、設定された場面設定が時代の変化が合わなくなっている可能性や、本調査では PF スタディを用いたが、現代に即した内容で主張性を測定する指標が他に存在している可能性がある。また本研究では、P-F スタディ各反応を平均出現率±1SDを基準として高低群に分類した。しかし、参加者の人数が109名と少なかつたため、反応によっては群の人数に非常にばらつきが見られた。そして、今回は高低群の比較のみで、平均的でどちらにも含まれなかった参加者については検討しなかった。平均的な参加者の P-F スタディの反応傾向を詳しく検討することで、高低群にそれぞれ必要とされる反応や、平均的な参加者に必要な反応をより明確にできると考えられる。また、本研究では高低群に含まれた全参加者について検討したが、反応が高すぎる場合や、低すぎる場合に主張性や対人ストレスに問題が生じる可能性も考えられる。この場合、平均出現率を基準に高低群に分けただけでは反応傾向に問題がある参加者を分類することは難しい。今後は、高低群の中からさらに危険な反応を示す参加者を分類するような基準を設ける必要があると考えられる。

引用文献

- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 秦 一士 (2003). フラストレーション場面における敵意, 怒り, 言語反応の関係 甲南女子大学研究紀要, 39, 1-7.
- 秦 一士 (2006). 攻撃行動とP-Fスタディ 北大路書房
- 秦 一士 (2007a). 解釈指標 秦 一士 (著) P-Fスタディの理論と実際 北大路書房 pp.105-129.
- 秦 一士 (2007b). P-Fスタディの反応分類 秦 一士 (著) P-Fスタディの理論と実際 北大路書房 pp.44-71.
- 林 勝造 (1987). P-Fスタディ解説 1987版 三京房
- 金子幾之輔・中田久美子 (2003). アサーションに関する研究 桜花学園大学人文学部研究紀要, 15, 49-54.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 工藤晋平 (2006). おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧 -P-Fスタディを用いた検討- パーソナリティ研究, 14, 161-170.
- 丸山愛子・白川佳子 (2006). 社会に適応すること 山崎 晃・浜崎隆司 (編著) 新・はじめて学ぶこころの世界 北大路書房 pp.201-220.
- 松島るみ・塩見邦雄 (2002). 対人的自己効力感と学校における対人ストレスの関係について 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 241.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 坂野雄二 (1995). 社会的スキル訓練と認知行動療法 坂野雄二 (著) 認知行動療法 日本評論社 pp.125-136.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 目白大学心理学研究, 2, 1-12.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 玉瀬耕治・角野文宣 (2005). 対人ストレスとアサーション, セルフ・コントロールの関係 教育実践総合センター研究紀要, 14, 37-41.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-231.
- 吉村 聡 (2008). ロールシャッハ法とPFスタディによる攻撃の方向性に関する一考察 ロールシャッハ法研究, 12, 43-50.

Relationship between the interpersonal stress and assertiveness of university student.

Yukari Umoto

In this study, relationship between assertiveness and interpersonal stress of university students was investigated, in order to explore the way to reduce their stress. Participants were 56 university men and 53 women. Interpersonal stress was measured by a questionnaire, and assertiveness was measured by both questionnaire and the projective test(P-F study). As a result of correlation analysis, negative correlation were significant (1) between "persuasive and negotiation" factor and "personal dislocation" factor ,and (2) "persuasive and negotiation" factor and "personal conflict" factor with men. It was suggested that skills of persuading and negotiating were effective to reduce stress of "personal conflict" and "personal wear-out". Next, the relationship between the personal stress and assertiveness measured by the P-F study was examined. The result that woman who strongly showed "ego defense" reaction felt much more personal stress than man suggested that there would be a gender difference in interpersonal relationship strategy.